

中国語から日本語へのサイト・トランスレーション遂行時の 眼球運動に及ぼす通訳不安の影響

宋啓超（北京外国語大学）

1. はじめに

通訳は即時的、かつ多元的处理を伴う高負荷タスクであり、学習者に強い不安を感じさせる。不安が通訳の産出成績を低下させることは知られているが、情報の処理過程への影響や不安の下位次元ごとの影響は十分に解明されていない。そこで、本研究では、不安を三次元に区分し、それぞれが通訳過程における認知処理にどのような影響を及ぼすかを検証する。

2. 方法

2.1 実験参加者

中国の大学の修士課程に在籍する上級日本語学習者 42 名（平均年齢 24.2 歳、平均学習歴 6.5 年）が参加した。全員が JLPT-N1 合格者であった。通訳学習歴を有する 1 名とデータ欠損のあった 3 名を除外し、残りの 38 名を分析対象とした。

2.2 材料

刺激文は通訳教材から抜粋した 10 文で、文長・語彙難易度・情報量を統制した。通訳不安の測定には董ほか（2013）による中国語版「通訳不安尺度」（20 項目、3 次元）を用いた。通訳に関わる困難性（課題の難しさに起因するストレス）、サービス性（外部評価に対する懸念）、自信（自己効力感）の 3 次元が含まれている。

2.3 手続き

実験は個別に実施された。刺激文は Tobii Pro Lab により、ランダム呈示され、参加者は即時に中国語へサイト・トランスレーションを行った。測定指標は、処理負荷を反映する訪問時間と処理の深さを示す注視回数であった。

3. 結果と考察

まず、尺度全体の信頼性を検討した結果、Cronbach の $\alpha = .86$ 、McDonald の $\omega = .89$ と高い値を示し、質問紙の内的妥当性が確認された。そして、各下位尺度の平均値はいずれも 3 点を超えていることから、中程度以上の不安が示された。

訪問時間を従属変数とした線形混合効果モデルの分析では、困難性が有意傾向を示した ($\beta = 0.03$, $p = .088$)。不安が高いほど訪問時間が長くなる傾向が認められ、課題の困難さを強く意識する学習者は、逐語的处理や確認に時間を要することが推察される。一方、サービス性 ($\beta = -0.03$, $p = .113$) と自信 ($\beta = 0.00$, $p = .802$) はいずれも顕著な影響が示されなかった。さらに、注視回数を従属変数とした線形混合効果モデルにおいても、困難性が有意傾向を示した ($\beta = 0.27$, $p = .063$)。困難性不安の評定値が高い学習者ほど、注視回数が増加し、繰り返し視覚的確認を行うストラテジーを採用している可能性が窺える。しかし、サービス性 ($\beta = -0.03$, $p = .802$) と自信 ($\beta = -0.05$, $p = .687$) はいずれも顕著な影響がみられなかった。

これらの結果を総合すると、通訳不安は一様に処理効率を低下させるのではなく、不安の下位次元によって認知処理に異なる影響を及ぼすことが明らかになった。特に、困難性不安が高い場合、注意資源が分散し、モニタリング機能がうまく働かないため、処理時間や注視回数が増加することが考えられる。他方、サービス性や自信に関わる不安の影響は、本研究のようなサイト・トランスレーション課題においては表れにくいことが示された。